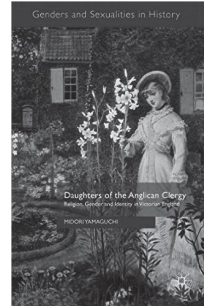


書 評

Midori Yamaguchi, *Daughters of the Anglican Clergy* (Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2014)



並河 葉子

本書は非常に質の高いイギリス女性史の研究書であるが、一番の魅力は物語としての歴史の面白さを我われに堪能させてくれるところにある。

専門書はとかく読みにくい、あるいは読み物としてはつまらないのが通例。ところが本書は、読み物として文句なく面白い。

ヴィクトリア時代の牧師館の女性たちの一生が、生を受けてから次の世代へと世代交代していくまで、実に生き生きと描かれている。創作ではなく、日記をはじめとする膨大な同時代史料をまことに緻密に配置し、史料に自然に語らせていく手法は見事というほかない。

性格のことなる史料のなかのさまざまな記述から核になるフレーズを的確に見つけ出し、時間軸にもブレが出ないよう適切に並べてひとつの物語を完成させるのは、歴史研究者でなくてはできない。というのも、その時代ごとの特性を象徴するエピソードやそれが生まれてきた背景は、当時の社会についての正確な知識と最新の研究動向の把握なくしてはできないからである。本書も著者が関連する研究を注意深く踏まえた上で導き出した自身の論理構造を記述の軸にすえていることがイントロダクションを一読しただけでもよく分かる。

確固たる論理的な枠組みを持ちながらも、著者は日記の記述などから彼女たちの幼少期の躰、学業、恋愛や結婚についてだけでなく、生き方に悩むさま、婚外恋愛や当時のたわいもない姉妹でのやり取りにいたるまでを詳らかに、しかし、あくまで上品に史料に語らせていく。こうして牧師館の女性たちの日々の暮らしの積み重ねの描写を通して、彼女たちの一生が鮮やかに我われの目の前に姿をあらわす。行間からは、著者自身の日記の

書き手への共感がにじみ、それが読者の共感も誘う。女性史の意義とは時代も地域も越えた「越境性」にあることを示してくれる優れた研究書である。

本書は、冒頭で述べられているように、父親の職業で女性たちをカテゴライズし、研究するという比較的新しい研究手法を用いていることがひとつの特色である。実は、この手法は、聖職者家族を取り上げるときにもっとも威力を発揮する。「当方牧師の娘」というフレーズは、18世紀末も20世紀になっても、その人となりについて一定のイメージが社会的に共有されていた表現であった。これが、「当方、医者 of 娘」や「法律家の娘」あるいは「貿易商の娘」など、他のほとんどの職業ではこうはいかない。こうした職業は、時代ごとに社会的なステータスの変動していたからである。牧師こそ、長期にわたってイギリス社会で安定した社会的地位を維持した数少ない、あるいは唯一といってもよい「職業」なのである。

「レスpekタビリティ」や「ジェンティリティ」というのは、ヴィクトリア朝前後のイギリス史を研究する中で何度も遭遇することばであり、その内容をどのように捉えるのか、あるいはどれぐらい具体的にイメージを描くことができるのか、が研究そのものの意義や水準を左右するものであるといっても過言ではない。とらえどころのないことばであり、断片的に理解したり説明したりすることはできても、十分に語るのは困難を極める。なぜなら、これは時代とともに移ろい行く概念であったからで、こうしたことばの内容は、その時代に生きた人にしか分からないといえなくもない。歴史家の仕事は、隔たった時代に生きる人たちにそれを説明することにあるといわれればそれまでなのだが、それは大変に難しい。特定の牧師一家ではなく、集団としての国教会の聖職者とその家族の生活を取り上げることで、この、あいまいな、時代とともに形を変えていく「レスpekタビリティ」というもののあり様を具体的に述べることはじめて可能になるのだ。

18世紀末以来、イギリスでは非国教徒たちが社会的な影響力を増すなか、国教会側は体制維持のために様々な改革を試みた。国教会の聖職者たちも生き残りをかけてどのような戦略をとるのか、政治的にはきわめて多様な立場に分かれていく。それでも、聖職者が集団としてはきわめて均

質であったことはつとに指摘されている。

長い 19 世紀に変化したのは教会だけではない。新しく台頭してきたミドルクラスの上層部はジェントルマン階層に合流していったし、この階層の人びとが就く職業、つまりはジェントルマン的な職業も多様化した。国教会の牧師はそうした変化の中でも変わらず存在し続けたし、家族は女性も含めて「記述する」ことにきわめて熱心であった。イギリス人の「レスペクタビリティ」や「ジェンティリティ」を把握するのにこれほど都合のよい集団は他に見当たらない。

ところで、聖職者本人ではなく、「娘」に注目することでレスペクタビリティの継承と変化がより鮮明に浮かび上がるというのはどういうことだろう。社会の変化を受けて生き方を柔軟に変化させる必要に迫られていたのは、「牧師」という職業に就いていた男性、あるいは、その職業を継ぐことの多い息子たちではなく、彼らと活動をともし、規範として生きることを宿命付けられながらも、社会の変化にしなやかに対応していかなければならなかった、さらに、ときには積極的に規範そのものを変化させていこうと動いた女性たちであった。「牧師」の仕事は今も昔もそれほど変わらない。しかし、ヴィクトリア時代、経済的にも社会的にも上昇する集団があった一方で、伝統的なジェントルマンの一角を占め続けた聖職者家族の経済状況は、改革のおかげで下がることはあっても上がることを期待するのは難しかった。変化する状況を生き抜くには、彼女たちがレスペクタビリティを保ちながら新しい生存戦略を模索していくより他なかった。次世代を担う娘たちが成長した後の姿がそれを物語っている。妻として、文筆家としてあるいは女教師として、宣教師として。

本書でも明らかにされているように、19 世紀半ばまでは彼女たちの配偶者の多くが同じく聖職者であったが、世紀末以降、軍人や教師なども含め、聖職者以外と結婚する割合が顕著に増えたとし、配偶者の職業も非常に多様化した。これは、聖職者とならぶステータスを獲得したあたらしい職業がこの間に増えていったことを示している。

19 世紀の間、牧師館の娘はやはり聖職者の妻となって家庭を支え、ヴォランティアな活動に勤しむことが多かったのが、次の世代になると彼女たち自身も職業を持ち、自活する例が増える。19 世紀半ばまではカヴァネス

ぐらいしか見当たらなかった女性にとってのレスpekタブルな仕事は世紀転換期になると幅が広がり、大学で研究に勤しむ女性たち、教師や宣教師として海を渡る女性たちや医師として植民地で活躍するものが出てくる(宣教師といっても、女性の場合、実際の活動は教師としての役割が大半であった)。新しいレスpekタブルな職業婦人の先頭を切った人びとの多くが聖職者家庭出身であったことは興味深い。聖職者家族が集団として常に「知的専門職」の中核を構成していたことを示す典型的なエピソードであろう。

複数の世代にまたがる女性たちの生涯をたどることで、彼女たちが母からそのまま継承したもの、しようしながらも時代の変化に合わせて変えざるをえなかったものが明らかにされる。世代の継承の意味や形は父から息子へと母から娘へでは、同じ家庭のなかでも大きく違う。言うまでもないことだが、女性に焦点を当てながら家族の歴史を取り上げることが、「ジェンダー」とは何かを考える上で大きな意義を持つ。

「聖職者の娘」から引き出すことのできる要素をすべて余すところなく語ることで、当時の社会を語り、19世紀の知的階級の女性の群像を語りながら現代の我われが抱える問題を間接的に照射してみせる見事な筆致は、卓越した筆者のセンスによるものであると同時に、当時の一人ひとりの暮らしぶりや内面を数多くの記述史料から時間をかけて丁寧に読みといていた緻密な研究の積み重ねである。著者に心からの敬意を表したい。本書ではあまり言及されていないが、息子と娘の関係あるいは夫婦間の役割をめぐる葛藤などが今後の研究のなかで取り上げられれば、ジェンダー史としていっそう深みと意義が増すと思われる。一読者として、著者の今後の研究に大きな期待を寄せつつ、本書の紹介を閉じたい。